

た。あてもなしに波止場の上の青草の茂つた岡を上つてゆくと、かなり壯大な建物の遺跡があり、説明の建札には聖ポール寺院の廢墟と記されてある。その昔ポルトガルの勢力盛んなりし頃、朝な夕なにつくこの寺院の鐘の音が眼下にさはぐ海峡の波をわたつて鳴り響いたであらう俤が偲ばれる。崩れ残りの煉瓦壁のなほ高くそより立つてゐるのに、蔦かづらが青々とまつはり、屋根もない床の面には、何某の墓と銅板に彫りつけたのがあちこちに残つてゐて、薄ら寒い鬼氣が吹き上つて来るやうな感じがする。ふと見上げた壁間に「神父フランシス・サビエールの遺骸がゴアに移されるまで、この處に埋められてあつた」と刻んだ銅板がかゝつてゐる。逸早く東方の教化に身を委ね、日本にも布教の先鞭をつけたこの神父が、永眠の姿を神々しくこゝに横たへてゐたとは知らなかつた。ゆくりなくこの聖跡を訪うたことが、何やら宿縁の絲に繋がれてゐるやうに思はれて、敬虔な氣持になり、せめてもの心やりに、ポケットから三四枚の日本紙をとり出し、鉛筆の芯を削り出して銅板の文字をなすり取つたのがこの紙片である。その後の二十數年を通してそのままに保存し、折にふれて擴げて見れば追懷に耽るものゝ、持ちまへの無精で、今に裏打ちすらもしてないこのていたらくが、とう／＼憎い魔物に汚されてしまつた。神父の靈に對しても申しわけないやうな氣がする。

鼠にはこれまでも數々の恨みがある。珍藏の拓本をずた／＼に喰ひ割いたり、よりによつて大切な書物を汚損したり、不遜にも枕頭に跳躍したり、その他一々擧げきれない悪行、何とも始末におへぬ代物である。度々の受難にこりてせめて書齋だけはと、出来る限りの防備を固めて侵入の隙なからしめた積りである、對抗意識でも具へてゐる悪魔かと思はれる程に益々悪性を發揮して鼻をあかしにかゝる。要所要所にくばつて置く薬をきかした餌を、